

---

# **恋をしたくて 夜叉心 [一万文字小説]**

尖刃燕角

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋をしたくて 夜叉心 「一万文字小説」

### 【Zコード】

Z4623Z

### 【作者名】

尖刃燕角

### 【あらすじ】

恋をしたいけれど恋をすることができない主人公。そんな主人公は不死の身体を持つ生き物で、彼が好きになつたのは自分の一族のコピーだった。そんな一人が出会う恋物語。

## (前書き)

二万文字小説に続く、長文短編小説。

ちなみに、前作は「疑似恋愛シミュレーター」で、

<http://ncode.syosetu.com/n06>

27▼/に飛べば見れます。

では、どうぞ。

俺の中には、大いなる魔物が住んでいる。

それは時に、悪夢と呼ばれるものであり、  
それは時に、不死と呼ばれるものであり、  
それは時に、人生と呼ばれるものである。

次に、俺は恋愛ができない。

それは恋愛下手べたといつことではなく、俺が呪われているからである。

そして、俺の実年齢は、100年と少しである。

なぜそんなに生きているかといつと、先ほども書いたように俺は“不死”だからである。

と言つても、俺の見た目は20歳前後であり、誰も俺を見て実年齢を知り得ることはできない。

さらに言つと、俺は人と関わろうとしない。

だから、俺の実年齢や実態を他人は知り得ることはできないのだ。

そんな俺はある日、街を歩いていた。

それは、とても暑い暑い夏だった。

「あひこ——

俺は小声であひのままを口にする。

しかし、それを口にしたところで、何かが特別変わるわけもなく、俺は暑さに負けずただれ歩いていた。

だが、その暑さのおかげで、俺はついに目的地を決定した。

そう、

俺はこんな夏空の下、目的地も決めずにフランフランと無駄に歩いていたのだ。

ここで、決定した目的地は、コンビニエンス・ストア・・・所謂、コンビニである。

『えつ？ なぜコンビニに決めたかつて？』

『そんなの涼しいからに決まっているだろーー！』

『それ以外で、コンビニに入る奴なんて、この世にいるのかよー。』

？』

俺は一人でそんなノリ突っ込みをしながら、コンビニに入った。

“ ウイン ”

コンビニの自動扉を越えると、俺の田舎レジの女の子が移りこんでいた。

『 可愛いーーーーー』

そう、俺の心がピヨンピヨン飛び跳ねる。

しかし、興奮ばかりしても仕方がないので、俺は『 諦め 』を選択した。

俺の家系は、代々恋愛に対し、呪いがかけられている。

それは、俺の古い先祖が“何か”をしたからであって、その理由は未だに俺の代になつてもわかつていない。

しかし、そんなことはどうでもいいんだ。

問題なのは、呪いの内容である。

『俺は恋愛ができない』

これはさつきから言つてゐるのでわかつてゐるだろう。

だが、これで問題なのは、俺自身が恋愛をすることができないということなどではなく、俺が恋愛をすると、相手の寿命が減つてしまふということである。

だが、正確に言えば、単に寿命が減るというわけではない。

俺が恋をした相手は、俺に寿命といつ“概念”を「えなければいけないのである。

なぜなら、俺には寿命というものが存在しない。

だから、不死という存在なのである。

まあ、とにかく、相手は残りの寿命のしづ、俺が恋をして、相手

が恋をした瞬間、 、 、

すなわち、両想いになつた瞬間、ランダムで俺に残りの寿命のうちの数年を俺に与えなければならぬ。

しかし、寿命は目に見えるものではないので、相手の残りの寿命が何年かも知り得ることはできないし、俺に与えられた寿命が何年かを知り得ることは誰にもできない。

ただ、相手の寿命が残り20年だった場合、自分の寿命は20年になるかもしぬないし、

はたまた、0年になり、即死となる可能性があることは明白である。

そして、もちろん逆も然りである。

とにかく、そんなこんなで俺は恋愛ができない。

つと詫つより、恋愛なんてしたくない。

なぜなら、俺は好きになつた相手の寿命を減らしてまで、恋をしたいと思わないからである。

なぜそこまでして、恋愛をする必要がどこにあるだろつか？

別に、俺が不死でいる限り、相手は長く生きていられる。

だから、俺が不死でいればいいのだ。

俺が相手<sup>すきなやつ</sup>を幸せにするためには、それしかないのだから・・・。

俺はコンビニで、漫画を立ち読みしていた。

それを時間にして、約5分間。

短すぎると、いつなつたのには、ちゃんととした理由があった。

そう、

彼女が！ レジの子が気になつて、気になつて仕方がなかつたのだ  
だ！！

だから俺は、コーヒーを買って外に出た。

本当は、漫画も欲しかったのだが、趣味を考おもわれるのが嫌だったの  
でやめにしておいた。

だから、必然的に次の目的地が決まる。

そう、何を隠そつ、決定した目的地は本屋である・・・。

そんな俺は本屋に入り、いつも買つている漫画本を2冊と、読ん  
だことも見たこともない漫画本を3冊買つ。

そして、俺は家に向かい、もちろん、家に帰つてからは、漫画を  
読んだ。

しかし、何時間かして、買った漫画のすべてを読み終えた俺は、  
腹が空いたことに気がつく。

だから、俺は飯を食べるのために外に出かけることを決めた。

『何こじょうつか?』

自分で作るのをめんどくさいこと思つ俺は、いつも外食。

だから、毎日何を食べに行くかで悩む。

それはそうと、昨日は中華料理だったな・・・。

『うーん、今日は何こじょうか?』

そう、、、そして、再び一ひと度悩む。

しかし、毎回すぐに決まるわけでもなく、街をブラブラ歩いて、最終的に疲れたからどこかに入るみたいな感じで飯を終わらせていた。

だって、その方が時間つぶしにもなるし、健康のためにもなるし、何より暇を持て余している俺にはちょうど良かつたから・・・。

だから、今日もとりあえず街をぶらついてみることにした。

କବିତା

すると、俺は彼女に出会つのである。

『《奇跡》、そんなことがこんなにも簡単に起きるなんて・・・』

俺は、まず始めに、彼女を見てそう思った。

そして、コンビニで出会った彼女は、俺の前を優雅に歩くのである。

『可愛』

『可愛いやうな————』と

俺は昔、オヤジに言われた。

「不幸は幸福を司る<sup>つかさど</sup>ものだ」

「人を幸せにしたくば、まず己<sup>己</sup>が不幸にならなければいけない」と。

最初は、この意味が全くと言つていいくほど分からなかつた。

しかし、今ならはつきりと何を意図とするのかがわかる。

そう、丶、

俺は初めから人を幸せになどできないのだ。

その資格を、俺は始めから失っているのである。

それが、想い人ならば、なおさらである。

好きなら、その人の命、丶、

すなわち、寿命をもらわなければいけない。

俺は所詮、人を不幸にしかできない生き物なのである。

俺は、彼女の後を付けることにした。

しかし、こんなストーカーじみたことをしたのは、生まれてこの方初めてだということを最初に知つておいてもらいたい。

そんなことはせひおき、彼女の後を付けることとした俺だが、あと分後を付けても、10分後を付けても、何も状況が変わらない。

ただひたすら彼女は、俺の前を歩き続けるだけで、ビルに行くわけでもなくフラフラと歩き続けた。

『つまんないなあ・・・』

俺は次第に、そう思つようになった。

『あと10分動きがなかつたら、その辺の牛丼屋にでも入る』

俺はそう心に誓い、彼女の後をむけた。

すると、約5分後、彼女は動き出すのである。

急にすたすたとした早歩き。

『まさか、気づかれたか!?!』

俺は咄嗟に、そう思った。

だって、どうとか考えられないじゃないか!

さつきまでゆっくり歩いていたのに、急に早歩きとなるなんて・・・

・。

『しかし、いいで諦めたら男が廃<sup>すた</sup>る・・・』

そう思つた俺は、足早にして、そりと後を付けることにした。

だが、いくつかの角を曲がると、小さな路地に入ってしまった。

『いいじゃだよ・・・』

俺は、もう心中で呟<sup>つぶや</sup>く。

だが、今更諦めるのもなんだか嫌だったので、俺は諦めずに彼女を追いかけることにした。

しかし、俺の脚の方が長いはずなのに・・・

スピードは確実に俺の方が上なはずなのに、一向に距離が縮まらない。

そして、不思議とドンドンと彼女は見えなくなつていき、最終的に彼女に逃げられる羽田になってしまった。

「くつやーー！」

「なんだよあこいつ、 、 、 」

俺は少しイライラしながら、 そう口にした。

別に追いついたところで、 何かしたかつたわけでもないので、 イライラする必要性はないのだが、 それでも俺は、 やっぱりイライラしていた。

そんな覚悟を持っていたものの、 俺は人に恋をした。

それは今回だけではない。

俺は過去に何度も、人に対して恋をした。

それは俺が人であるから、 、 、 それは俺が男であるから、 、 、

そう、 、 、

所詮は、俺も人で、人は恋をする生き物でしかなかつたからである。

しかし、今回の俺は一味違う。

それは、覚悟を最大限に引き上げたから・・・。

もう『愛することで、自分を惨めだと思いたくない』と思つたからであった。

『やで、どうしたものだらうか?』

だが、10分もしない「うち」、「暇だなあ・・・」と俺は呟く。

そして、俺は帰つてからテレビをつけ見て見た。

そんなことを思つていると、いつしか「イライラしていた」と思はれて、飯を食つて、家に帰つていた。

やはり、俺はこじが好きである。

「の、こつものよづて変わらない味・・・。

そして、安くて・早くて・「まこと」。

俺は「イライラしながら、近くにあつた牛丼屋に入った。

いくらなんでも、やるいじがなぞおかしい。

『やめて、どうしたものだらうか?』

俺は困り果てた挙句、風呂に入ることを決める。

「ふう・・・」

俺は体を洗い終わって、風呂から出ると、ため息を吐いた。

その理由は、なんだか疲れたから。

それも、そのはずだ。

何も用がないのに名前も知らない女の子を追いかけて、それでいて疲れないわけがない。

俺は、もう一度ため息を吐く。

「はあ・・・」

「今日は疲れたなあ・・・」

その言葉は、さつきのため息より少し大きく聞こえた。

それは、俺が贅沢しなければ、すこしのじかん数百年間では底までたどり着けないほど多大な金額だった。

次の日、俺は朝出かけると、まず始めにバイトに向かった。  
だが、はっきり言って、俺は仕事する必要などない。

その理由は、オヤジが俺のために財産を残してくれたから。

しかし、仕事を・・・

バイトぐらいいしなこと俺の体も腐っちゃう。

さすがに、毎日飽きてるのに、そこでバイトもしていないとなると、体がとつより、心が持たない。

なんせ、俺は飽き性なのである。

そんなこんなで、バイトに向かつた俺・・・。

少しでもいいから、人と話すことのできる仕事がいいと思いつき、接客業といつものに就いた俺。

「こりゃしゃべらせー！」

「『来店ありがと』『また来ます』」

ひとつ、普段の俺ではありえないテンションと、話し方。

どうやらしつぶ、長くは働かないし、クビにされても困らないので、遊び半分でそういったことをしていた。

しかし、店長は優しいのか、馬鹿なのか知らないけれど、そんな風に遊んでいる俺をクビにしない・・・。

『やべ、やうじたものだわいか?』 僕はふと、そんなことを思った。

しかし、そんなことを思ったといひで、仕方がない。

とりあえず、僕は『動けるだけ動け』とこいつを推薦するところとした。

そんなこんなで、バイトの終了まで、あと一〇分となつた僕・・・

1

だから、やがて元気よく「こ、う、しゃ、こ、わ、せ、こ、こ、」と言つてみる。

だが、なんだか面白くなくなつてきた・・・。

そう思い始めたので、結局俺は最終的に「いらっしゃませ」と普通に言っていた。

とにかく、そんな思いをしながらも、俺のバイトは終了した。

そして、俺は帰宅準備をする。

バイト先の制服を脱いで、「疲れたあ・・・」とため息を一つ。

すると、後ろから「お疲れ様でした！」と、年齢的にも経験的にも後輩の子が声をかけてきた。

だから、俺は「あつづ…」と先ほどから続く謎のテンションで返しておいた。

それから、俺は荷物を持って外に出た。

さて、今から何をしようか?

時刻は17時過ぎである。

何もしたいとも思わない。

だが、俺の脳裏に、『あーそついえば、映画見に行こうと思つてたんだつた！』とこいつ言葉がよぎつたので、俺はそれを実行することにした。

「すいません、この映画の大人チケットを一つ

「おひとつですね？かしこましました」

残念ながら、そんな会話にももう慣れてしまった。

昔から一人。俺は、ずっと孤独だったから・・・。

そんなことを思つている矢先だつた！！

『あ！　あいつ！－！－！』

そう、心が叫んだのである。

『「何でしようか?」と聞かれると、困ってしまうなあ……』

腕を掴まれた彼女の第一声はそうだった。

「何でしようか?」

さつきまでの俺の覚悟はいとも簡単に崩れ落ち、俺はいつの間にか映画館の店員との会話を終えて、走って彼女の腕を掴みに行つていた。

ふと、俺の右側を横切った彼女。

腕を掴んだ方の俺は、そんなことを思つ。

だが、何も答えないのは可笑しな話だし、気が付けば、俺の口は勝手に動いていた。

俺「ごめん」

「なんだかさ、 、 、 」

君「何も言わなくていいわ・・・」

「だつて、あなたが言いたいことは、わかるもの・・・」

それが、次に彼女が俺に放つた言葉だつた。

『ビリーフことなんだ?』

俺は、今起きていることが理解できず、何度も出来事を心の中で  
反芻する。

しかし、全く解けなさそうな謎。

思わず迷宮入りしてしまった謎に、俺は怖くなつて口にする。

俺「君は一体  
ー?」

しかし、彼女は俺の問には答えなかつた。

□元に人差し指をあてて、「静かにしてください」と俺に発し、  
俺の手を握つて走つていぐ。

「何をするんだ! ビリーフことじでいるんだ! !」

俺は何度もそいつた言葉を発した。

けれども、自分の心は何故か警戒心がどこかに行つてしまつたよ  
うで、彼のことなんか気にしていないようだつた。

それもそのはずか、 、 、

俺と彼女・ 、 。

すなわち、俺と君との後ろには何人の人間が付けて来ていたの  
だから。

俺は後ろを付けてきていた奴等を撒いて、

いいや、正確に言えば、俺は手を引っ張られていただけなので撒いたのは君なわけだが、とにかくそいつ等を撒いたところで、俺は君に聞いた。

俺「君は何者なんだ!」

「一体、何が目的で・・・」

「そして、なんで後なんかあとを付けられているんだ!..」

しかし、君は答えようとではない。

だが、俺もこんなところで引き下がる気などなかつた。

俺「俺は君のことが・・・好きだつた・・・

「けれど、今は何が起きているのかもわからない状況だから、正直君への気持ちがわからなくなつてきた」

「だからさ、・・・」

「説明してくれないかな?」

君は、少し戸惑いながらも、その答えを述べようと口を開く。

君「私はね、・・・」

「あなたと同じで、普通の人間じゃないの・・・」

「だから、変な人に追われているの・・・」

俺「え！？」

それは、俺の理解の範疇ひきうちを超える話はなだった。

『普通の人間じゃないつて？』

『そんなのあいえないだろ？』

『つて言つても、俺も普通じゃないから・・・』

俺「だあ――――――！」  
「もう、よくわかんねえーやーー！」  
「所謂いわゆる何なん？」

「超能力者的な何とか、なんかなわけ？」

「どうせ、俺の心とかを読んだりしたんだろう？」

「だって、やつを俺の言いたいことがわかるって言ったもんな？」

「そういうことだろ？」

君「ええ、」

「そうよ・・・」

「けれど、それ以外にも別のがあるのよ・・・」

俺「はあ？」

「他にもなんか別の物だつて？」

「一体、他にどんな超能力があるつていうんだよ？」

俺は心中でイライラしながら、君にそんな疑問をぶつかる。

すると、君はそんな俺の心を覗いて、答えるのである。

君「いいえ、少しだけ違うわ・・・」

「だって、それは超能力って言つよりも、どちらかといつと特殊  
能力って言つた方が近いものだもの・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「私はね、“不死身”なのよ・・・」

しかし、何回聞いても、君の言っている《私は無制限の不死なの

そう言われた俺は、すぐには納得ができなかつた。

だが、よく考えれば、、、つと言つてもよく考えなくともそうだ  
が、俺も“普通の人間”じゃないし、他に俺みたいな“特殊な人間”  
”が他にいたつて何も不思議じやない。

なんたつて、俺と君は同じ“不死”で、その“不死”的内容が違  
うだけなのだから・・・。

だから、俺は君の言つたことを理解しようとした。

』という意味がわからなかつた。

なぜなら、俺の不死の条件は、誰かと恋愛をするなり、その相手の寿命を貰うこと。

だから、厳密に言えば、俺は絶対的な不死ではない。

俺の不死には制限がかかつてゐることになり、死にたいと思えば恋愛をすれば死ねるのだから、厳密に言えば不死ではないのである。

だが、君は自分の不死を『無制限』だといつ。

君は自分の言つてゐる意味が、わかつてゐるのだろうか？

君は死ねないんだ。

死にたくても、何があつても死ねないんだ。

だから、俺はそのあたりを君から詳しく聞くことにした。

なぜ、君は“無制限の不死”という存在になつたのか？

俺と同じで、一族といつ存在が関わつてゐるから？

それとも、何か別の存在せいで、そくなつてしまつたのか？

俺は色々なことを君から聞き出せりつとした。

しかし、君はいたつて落ち着いた顔で言つのである。

君「そんなに、いつへんに聞かれても答えられないよ・・・」  
「そしてさ、夜になってきたしお腹が減っちゃった・・・」  
「だからさ、まずはご飯食べに行こうよ？」

俺「え！？」

俺はその突拍子もない答えに度肝を抜かれた。

だがしかし、腹が減っていたのも事実。

だから、俺はとりあえず彼女の提案に乗り、近くのファーストフードの店に入る。

そして、商品を頼んでから席に座り、それを頬張りながら彼女に真実を問いただした。

すると、君は言ったのである。

君「私はあなたとは違うわ・・・」

「あなたの“不死”は一族の絡みでしょ？」

「でも、私は違うの・・・」

「私は、、、いいえ、、、私達はあなたの一族を基にして作られた“人造人間”なのよ・・・」

“人造人間”

それが俺達の間で、どんな意味があつただろうか？

そんなちっぽけなことは関係ないだろ？

君が変な奴等に追われていた理由はわかつた。

組織を抜け出したから、その組織の連中に追われている。

そんなどころじゃないのか？

俺には君のしたことや、したいことがなんとなくわかる気がする。

別に、だからと云つて、君みたいに“人の心を読む力”は持ち合  
わせていない。

だが、俺にはわかる気がしたんだ。

所謂、以心伝心といつづだろうか？

俺には君が考へていることがわかつてしまつた。

だから、俺は君のために組織を潰すことを約束する。

別に時間があつたし、お互に“不死”という存在ならば、それ  
くらいのことに時間をかけてもいいと思つたから・・・・。

だが、君は俺を気遣つて言つのである。

君「オリジナルは私達コピーにかかるべきではないの」「オリジナルには“不死”という能力しかないから、、、」「私達コピーには恐ろしい能力を持つている者もいるわ・・・」「あなたや・・・私なんかが太刀打ちできないような者もね・・・」

だが、そんなこと、俺達2人が力を合わせれば何とかなるんじやないのか？

俺は、そう思い、君に想いを告げる。

俺「好きだ・・・一緒にいろいろ・・・」

君「ダメよ・・・そんなの絶対にダメよ・・・」

俺「君がなんて言おうと、絶対に俺はその組織を探し出して潰すぞ？」

君「あなた・・・自分で何を言つてているかわかっているの？」「あの組織には、絶対に勝てないわよ！」「はつきり言つわ！」「私がここに来たのは、組織の存在をあなたに伝えるため・・・」「あなたに・・・オリジナルに無駄に死んでほしくないと思った

から・・・」

「あなたが捕まつて実験台にでもなつたらいけないと思つて來た  
の・・・」

「だから、好きとかそういうのは困るの・・・」

「あなたに好きって言われたといふでわたし

」

俺「君のことが好きなんだ!」

俺は囁くような声ボリュームで、 でも、はつきりと俺の想いを告げる。

そして、その意味があつたのかはわからない。

しかし、その言葉は、ちゃんと君の心に届いた。

君「知らない・・・」

「勝手にすればいいじゃない！！」

「

「・・・あのね、・・・」

「オリジナルは普通の人間と違うけれど、心は優しいって聞いたことがあるの・・・」

「アハハ！　あれは事実だつたんだね・・・」

君はそこで、俺に初めて笑顔を見せた。

そして、その笑顔は、俺が生きてきた人生の中で1番良いものだつたと思う。

俺「何言つてるんだよ！」

「君はまだ俺の何ども知らないだろ？」

「心が優しいのかも、それとも不死であつても、ただの一般人と変わらないのかも・・・」

「だからさ、噂でなんか決めずに、自分の頭で考えてから決めて

よ

「君は機械なんかじゃない・・・心のある“人間”なんだから・・・

・



私はあなたに“人間”って言ってもらえて、とっても嬉しかった。

今までの組織では、“ナンバー1348号”って呼ばれてたから。

・・。

だから、大好きなあなたに“人間”って言ってもらえて、本当に嬉しかった。

でもね、私はあなたと違つて、別に死ねないわけじゃないの。

確かにね、あなたには「死ねない」って言ったわ。

そのことは事実だし、間違いないと認めるよ？

でも、私の脳部にはメモリーチップが埋め込まれていて、私はそれで活動しているの。

言つたでしょ？

私は人造人間なの。

人造人間・・・それは名前の通り、私は造られた存在。

あなたの先祖の体の一部の組織を培養し、肉体を生成する。

すると、その肉体は“不死”という存在になる。

けれど、それは血肉を培養した、ただの肉体・・・ただの肉塊。

だから、考えるための場所が、肉塊には存在しないの。

そのため、脳という器官の代わりに、私達、人造人間の脳部にはメモリーチップが埋め込まれているの。

そして、それで私は考えて生きている。

だから、考える力によつて、時に反乱分子になる可能性がある私達。

そんな人造人間わたしたちを研究者達が野放しにしておくはずはないでしょう？

だから、脳部のメモリーチップのすぐ隣には起爆チップが埋め込まれてるの。

だから、"研究者達が持つている起爆スイッチ"か、"自分の意志"のどちらかで、私は死ぬことができるの。

もちろん、その起爆スイッチは今も組織の研究者達が持つてている。

だから、私が組織のところに行けば、爆破されるかもしれない。

その威力はとてもないものだし、私の仲間がそれで死んだのを知つてゐる。

だけどね、組織の研究者達は酷くつて、自分の周りにバリアを張る機械を身に着けてるの。

賢(かしこ)い一 虫みたひな奴等だからね・・・。

私達の命は犠牲にできても、自分達の身を護ることだけは知つてゐるの。

だから、私達コピーが反乱を起こしたところで、絶対に誰一人として組織の人間を殺すことなんてできないの。

だから、私が死んでも何の意味もないの・・・。

だつて、私が死ぬということのは"あなたを悲しませる"ということにしかならないのだから・・・。

だから、私は絶対に死ぬことができない

。

私はあなたのために生まれてきたのだから

。

全てはあなたのために生まれたことなのだから

。

(後書き)

最後の終わりが変ですね。  
ですが、最初思つてた感じとだいぶ違うし、作者自身も想定外の終  
わり方ということでお願いします。  
読んでくださいありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4623z/>

---

恋をしたくて 夜叉心 [一万文字小説]

2011年12月17日19時53分発行